

近代日本におけるキリスト教児童文学の受容

— *Peep of Day* シリーズの翻訳をめぐる —

柿 本 真 代

本稿は児童文学研究の観点から、イギリスの児童文学 *Peep of Day* シリーズの受容と、日本における翻訳とその影響について考察した。*Peep of Day* とその続編 *Line upon Line*、*Precept upon Precept* は教派や地域を問わず、明治初期の宣教師による教育活動に頻繁に用いられていたことが明らかになった。また、長老派のカロザースやアメリカン・ボードのジュリア・ギューリックがそれぞれ翻訳を手掛けたが、訳文はともに漢字を読めない人々にも読めるような工夫がなされおり、伝道を目的としながら同時に子どもや女性に書物を届けようとする試みであった。

はじめに—近代日本児童文学史におけるキリスト教

近代日本の児童文学史におけるキリスト教の重要性はよく知られている。鳥越信は1868年からの約20年間を「日本児童文学史の草創期」と位置づけ、その内容を大きく1「キリスト教の伝道を目的としたもの」、2「科学読み物・知識読み物などの啓蒙的なもの」、3「外国の本の翻訳・翻案もの」、4「江戸時代の伝統をひきつぐ赤本・草双紙のたぐい」の4領域に分類した⁽¹⁾。また、関口安義もその叙述を「キリスト教と児童文学」からはじめている⁽²⁾。

ところが「草創期」の近代日本児童文学史におけるキリスト教児童文学の重要性はすでに通説となったものの、初期のキリスト教児童文学の受容史については十分に検討されてきたとは言い難い。牧師として活動する傍ら創作にも従

事し、多くのキリスト教児童文学を書いた沖野岩三郎は、「児童をめがけて呼びかけたもの」として日本最初のトラクトといわれる『真理易知』を、また児童文学のさきがけとして『心の夜あけ』と『さいはひのおとづれ わらべてひきのとひとこたへ』を位置づけたが、その後の児童文学史では沖野の叙述が踏襲され、新しい資料の発掘や制作過程の解明についてはいまだ十分になされていないのが現状である。

そこで本稿で注目したいのは、明治初期に日本に紹介された「ノンフィクションの分野で、ヴィクトリア時代の子どもの宗教的な作品でひじょうに人気があった」といわれるイギリス児童文学である *Peep of Day* とそのシリーズである。

佐波亘編『植村正久と其の時代』では、この時期の子ども向け書籍として『訓蒙耶蘇物語』の書影が掲載され、「原著者は英国の婦人。同著者の邦訳ものに『真神教暁（まことのかみのおしへのよあけ）』（明治六年）『旧約聖書の話』（明治十一年）がある。本書はメソヂストのマクレー R. S. Maclay 夫人の訳」とキャプションがつけられている。ここで紹介されているように、『真神教暁』、『旧約聖書の話』、『訓蒙耶蘇物語』はいずれもモーティマー夫人の作品で、子どもに神や聖書の歴史をわかりやすく説明した作品である。

本稿では、これらのモーティマー夫人の作品がどのように日本へもたらされ、翻訳されたのかを明らかにすることによって、キリスト教伝道が近代日本の児童文学史にどのような影響を与えたのかについて検討していく。

I *Peep of Day* シリーズと日本での受容

1 イギリス児童文学史におけるモーティマー夫人

モーティマー夫人こと Favell Lee Mortimer、旧姓 Favell Lee Bevan は 1802年にロンドンのラッセルスクエアで、銀行員の娘として生まれた。家族は

クエーカー教徒であったが、25歳のときに福音主義に転向した。1827年からは父がフォスベリーに設立した教区学校で子どもたちに聖書を教えはじめ、この経験をもとに記した *Peep of Day* を1833年ロンドンのハッチャーズ社 (Hatchards) から刊行した。⁽⁶⁾

モーティマー夫人が活躍した19世紀なかばは、イギリス児童文学の黄金期ともいわれ、すでに教訓性を脱して純粹に子どもの楽しみを目指した児童文学も誕生しつつあった。しかしモーティマー夫人はあくまで道徳的な立場をとり、日曜学校運動を背景に活躍した18世紀以来のトリマー夫人 (Mrs. Sarah Trimmer) やシャーウッド夫人 (Mrs. Mary M. Sherwood) の立場を継承するものであった。⁽⁷⁾

最もよく読まれたのは *Peep of Day* で、4歳から6歳程度の子どもたちに聖書を読むための準備として、わかりやすく聖書の歴史や物語を説いたものであり、*Line upon Line* と *Precept upon Precept* はその続編である。ほかにも文字教本や地理書などの子ども向けの作品がある。

モーティマー夫人の作品の特徴のひとつは、あたかも教室で教師が生徒に尋ねるように、子どもたちへ問いかけたり、語りかけたりする文体にある。また、子どもたちに知識を問う文が挿入されたり、讃美歌が挿入されたりすることもあるため、子どもが自分で読むだけでなく、母親が子どもと一緒に読んだり、教区学校で教師がテキストとして活用したり、あるいは日曜学校のご褒美としても用いられた。子どもたちに神への畏怖の念を抱かせることが目的であったために、ときにその表現は残酷で、たとえば罪人が地獄の業火で焼かれ歯ざりをして泣き叫ぶ描写などの描写もあり批判を受けることもあったが、そうした残酷な表現と神の愛についてのあたたかみのある表現が対比されることが魅力のひとつであったといわれる。⁽⁸⁾

19世紀なかばにはチャールズ・キングスリー (Charles Kingsley) 『水の子』 (1863) やジョージ・マクドナルド (George MacDonald) 『北風のうしろの

国』(1871)なども登場し、ファンタジーが全盛期をむかえるが、モーティマー夫人の作品は日曜学校や海外宣教で長く愛読されていった。現在日本語で読めるモーティマー夫人の作品はトッド・プリュザン (Todd Pruzan) 著、三辺律子訳『モーティマー夫人の不機嫌な世界地誌：可笑しな可笑しな万国ガイド』(バジリコ、2007) ぐらいであり⁽⁹⁾、日本ではほぼ忘れられた存在であるが、19世紀の日本伝道においてモーティマー夫人の作品は重要な役割を果たしていたのである。

2 日本における *Peep of Day* シリーズの受容

Peep of Day は1833年に刊行されたのち、1838年には同じハッチャーズ社から5版が出版されるなど、本国で人気を博したのち、1863年から1901年のあいだに宗教書籍会社 (Religious Tract Society) から少なくとも37の言語や方言に翻訳されるなど、海外宣教に役立つものとして世界中で翻訳された⁽¹⁰⁾。

日本で *Peep of Day* シリーズが活用されたのは、キリスト教禁止の高札が撤去された1873年ごろからと推測される。アメリカン・ボード (American Board of Commissioners Foreign Missions) から最初に派遣された独身女性宣教師のひとりであるタルカット (Eliza Talcott) は、1873年12月16日付の書簡で以下のように報告している。

3週間前に学校ができ、生徒はいま17名います。生徒の多くは英語のリーディングや裁縫を学びに来ています…ある22歳の女性は若いクリスチャンの妻で、学校に来ないかと尋ねましたが、あまり時間がなく英語はとても難しいのでできるだけ聖書の勉強に時間を使いたいとのことでした。英語の教科書として *Peep of Day* を使うと私が説明すると、彼女は学校に出席することを決めました。⁽¹¹⁾

タルカットらは神戸花隈村前田兵衛方で1873年10月ごろから教育活動を開始した。⁽¹²⁾石井紀子によると、この「神戸ホーム」では学校が開始された1873年からカリキュラムが改革される1878年まで、*Peep of Day* が定番の英語教科書として使われたという。⁽¹³⁾*Peep of Day* は聖書の内容と同時に英語を学ぶためのテキストとしても重宝されていたのである。

一方、1873年8月に熊本洋学校に入学した坂上竹松の旧蔵書にも *Peep of Day* が含まれていることが、竹内力雄によって明らかにされている。この *Peep of Day* には書き入れがあるというが、竹内はこの書き入れを「この本を教師ジェーンズ (Leroy L. Janes) からもらって嬉しかった」という意味ではないかと推察している。ジェーンズは長崎のヘンリー・スタウト (Henry Stout) から聖書やトラクトを取り寄せ、生徒たちへ配布していたというから、⁽¹⁴⁾この *Peep of Day* もまた、長崎のスタウト経由でジェーンズ、そして坂上のもとへ届いたものだろう。

さらに1876年のミッションの年次報告によると、E. T. ドーン (Edward T. Doane) がポナペ島から京都へ着任し、同志社英学校で *Line upon Line* および *Precept upon Precept* を用いて英語のできる生徒に旧約聖書を教えはじめた。⁽¹⁵⁾ところが余科 (神学科) の生徒たちは、すでに熊本洋学校でジェーンズの授業を英語で受けてきていた。ドーンが「南洋の裸の島民を取扱った手で我々を扱」い、旧約聖書の授業はひたすらテキストの暗誦であったことは彼らには受け入れがたく、「熊本から来た我々が、承認する筈はなかった」⁽¹⁶⁾と熊本バンドのリーダー格であった小崎弘道は回想している。⁽¹⁷⁾神学の専門的な講義を期待した熊本バンドの生徒たちにとっては、子ども向けの入門書が教材として用いられたことが大きな不満の種だったのである。

一方で、キリスト教についてまったく知らず、英語もできない者にとっては *Peep of Day* シリーズは有効な教材であった。小崎らと同じ同志社英学校の1期生、本間重慶の許嫁であった本間春は「イエスについては全く無知な状態」⁽¹⁸⁾

で1877年4月に同志社女学校へ入学するが、A. J. スタークウェザー (Alice J. Starkweather) からオルガンの手ほどきを受け目覚ましい上達をみせるとともに、「イエス様について聞くすべてのことを吸収し、勉強面でも素晴らしい成果をあげ、*The Peep of Day* もちゃんと」読んでいたとスタークウェザーは誇らしげに本部に報告していた。⁽¹⁹⁾

Peep of Day シリーズが活用された例は、熊本・京都だけでなく、横浜でも確認される。ヘボン夫人 (Mrs. Clara Mary Hepburn) の学校では、ルーミス夫人 (Mrs. Jane Herring Loomis) が毎週金曜日の朝12人の少女に讃美歌や *Peep of Day* のレッスンをしていたという (1874年12月4日付書簡)⁽²⁰⁾。ルーミス夫人は結婚前、オワスコアウトレット (Owasco Outlet Dutch Reformed Church) の女学校で働いていたというから、⁽²¹⁾ 少女の教育は得意分野であったのだろう。

またアメリカ婦人一致外国伝道協会 (The Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands) から派遣され横浜共立女学校で教鞭をとっていたベントン (Mrs. Lydia E. Benton) は、1875年に日本で J. C. バラ (James C. Ballagh) と結婚し、のちにヘボン夫人から住吉町小学校を引き継いだ。この学校でもまた、毎週水曜日は讃美歌や裁縫に加え、*Peep of Day* を1章ずつ読んでいたことが報告されている。⁽²²⁾

以上みてきたように、特に年少者や初学者を対象とした宣教師らの教育活動に *Peep of Day* シリーズは頻繁に用いられていた。さらに、特定の場所や教派に限定された使用ではなく、京都、熊本、横浜など複数の地で、またアメリカン・ボードや長老派など、異なる教派の宣教師らによって *Peep of Day* シリーズが使用されていたこともわかる。このことはすなわち、このシリーズの有効性が宣教師らにひろく理解されていたこと、また各地で *Peep of Day* シリーズを入手できる環境にあったことを示していよう。

先述のように *Peep of Day* は1833年にロンドンのハッチャーズ社から刊行

されるが、1848年にはアメリカトラクト協会（American Tract Society）からも出版されている。現在日本で閲覧可能な *Peep of Day* シリーズの多くは、アメリカトラクト協会が版元のものである。アメリカトラクト協会は、ロンドンの宗教書籍会社から派生した組織で、1825年ニューヨークで設立された。フィラデルフィアで組織されたアメリカ日曜学校連盟（American Sunday School Union）とともに多数のトラクトや児童書を発行し、アメリカの日曜学校運動を強く推進した組織としても知られる⁽²³⁾。子ども用のものだけでなく、キリスト教関係の出版物をひろくあつかい、日本でも1874年に委員会が組織された⁽²⁴⁾。

詳しくは後述するが、*Peep of Day* を翻訳した長老派のカロザースもアメリカトラクト協会へ手紙を送り、キリスト教書籍や書店経営、翻訳出版の資金を求めているし、*Line upon Line* を翻訳したジュリア・ギュリック（Julia A. E. Gulick）が所属したアメリカン・ボードもまた、書店経営とそこで扱う書籍の援助やキリスト教書籍の翻訳出版の費用をアメリカトラクト協会に求め⁽²⁵⁾ていた。*Peep of Day* シリーズを含むキリスト教書籍の日本における流通と翻訳にあたっては、アメリカトラクト協会の援助は不可欠であったのである。

II *Peep of Day* の翻訳

1 カロザースと文書伝道

Peep of Day の翻訳者である C. カロザース（Christopher Carrothers）はジュリア夫人（Mrs. Julia S. Carrothers）とともに、1869年7月に米国長老教会から派遣された。カロザース夫婦の教育事業などについてはこれまで多くの研究がなされてきたため、ここではこれらの成果および長老派の本部に宛てた書簡を参照しながら *Peep of Day* の翻訳に至った経緯についてみていきたい⁽²⁶⁾。

カロザースは1870年6月築地居留地6番地を落札し、自分たちとタムソン (David Thompson) らの2つの宣教師館を建てるが、自宅には書庫兼販売所を併設した。カロザースは日本人に英語を教えつつ、自身も日本語を勉強するかたわら、キリスト教禁制下でありながら早くも1871年3月には聖書やトラクト類の販売を開始している (1871年3月18日付書簡)。さらにカロザースは翌年の1872年3月3日、以下のように本部へ書き送っている。

聖書やその他のキリスト教書籍が日増しに求められるようになっていきます。私はこのような本の書庫を自宅に作りました。最近アメリカトラクト協会からたくさん本を受け取りました。これらはちょうど販売が開始されるところです。このようにキリスト教書籍を流通させることは、とても重要な仕事だと私は考えています。というのも、まず真理とはなにかを知ることによってやがてキリスト教へ導かれるはずだからです。

翌月にもキリスト教書籍の売り上げが増えていること、中国語のトラクトの注文を受けたことを本部に報告しており (1872年4月20日付書簡)、カロザースはキリスト教書籍を頒布する基盤として書庫をつくったのち、自分でも翻訳を企画し日本で利用できるキリスト教書籍の完成を目指していた。しかし1872年4月3日「銀座の大火」が発生、その翌日カロザースの自宅の台所のストーブの排気管から火が出て、宣教師館2棟の家財はすべて焼失した⁽²⁸⁾。これによって、カロザース宅にあった販売用の書籍もすべて灰塵に帰した (1872年5月20日付書簡)。さらに、日本語教師とともに準備中であった書籍の翻訳原稿や辞書の原稿も燃えてしまったという。カロザースが本部に宛てた1872年6月19日付の書簡には以下のように綴られている。

もうすぐ完成しかけていて、日本語の先生とともに心血を注いだアメリ

カトラクト協会の2冊の本、*Line upon Line* と *Precept upon Precept* の翻訳も燃えてしまいました。また、ヘボン氏 (James C. Hepburn) の辞書とは異なる3000語を収録した辞書の原稿も同じ運命をたどりました。しかし覆水盆に返らずで、泣いても仕方ありません。

ここでは *Line upon Line* と *Precept upon Precept* の翻訳原稿が燃えてしまったことを嘆くが、カロザースは *Peep of Day* だけでなくシリーズ3冊の翻訳を計画していたことは注目に値する。

カロザースはこの焼失によって生じた負債を補うべく慶應義塾で教えはじめるとともに、焼失した2棟の宣教師館の再建を急いだ。さらに、礼拝堂兼教場の小会堂およびキリスト教書籍の管理・販売のための石庫を改めて建設した。カロザースは二度と火事で書籍を焼くまいと、書庫の耐火性には特に気を配った。カロザースから受洗した原胤昭はこの販売所兼書庫について、「むちやに堅牢な石庫」で「二間に三間位な二階藏、火を恐れて戸前口を小さく低く、カ氏の身丈けでは幾度も頭を打つた。二階の窓も小さかった」とその有様を回想している。⁽²⁹⁾ 本部には上海の美華書館から中国語のトラクトを送ってほしいと頼み、⁽³⁰⁾ 1873年3月改めて書店を開業した。

日本人にも外国人にも利用できるキリスト教書店にするため、Religious Book Depository と英語と漢字で入り口の上に彫りました。…翻訳事業は目覚ましい進歩をしており、キリスト教書籍はコンスタントに売り上げを増やしています。私は *Peep of Day* を印刷する準備ができており、今は *Line upon Line* の翻訳に取り組んでいます。この本のシリーズは日本人にとっても人気があり、早いうちに日本語で出版されることが重要です (1873年2月6日付書簡)。

前節でみたように、たしかに *Peep of Day* シリーズはすでに日本に入ってきており、各地で活用されていた。ただし、カロザースが子ども向けのこのシリーズを翻訳しようと思ったのは、日本で人気があるという理由からだけではなかったようである。

この時期の伝道の様子を伝える資料として、宣教師らの書いた報告書・書簡に加え、異宗徒掛諜者らの報告書がある。異宗徒掛諜者は明治政府の雇ったスパイであり、信者として宣教師らに近づき伝道の様子などを逐一報告した⁽³¹⁾。諜者のなかでカロザース周辺に潜んでいたのが豊田道二である。豊田は、カロザースがひそかに聖書の講義をおこなっていることや「書庫ヲ建テ宗書ヲ国中ニ売捌ク卸シ所トスルノ志願此頃普請最中」であったことなども報告していた⁽³²⁾。カロザースは豊田に、*Peep of Day* の翻訳の動機についてこのように語ったという。

女房今月末ニ帰リマスユヘ二月朔日ヨリ女学校ヲコシラヘ女ノ子供ヲアツメ会話ヲ始メバイブルノ意味ヲ歌ナドニ造リ追々教ヘテ仕込ムナラハ終ニ真ノ耶蘇ノ弟子ニナリマセフ子供カラノ馴ガ大切デアリマス⁽³³⁾

カロザースが特に子どもにも読めるものにまず着手したのは、子どもの頃からキリスト教に親しみをもたせることで、やがてクリスチャンに成長することを期待してのことだったのである。翻訳が完成した暁には、妻ジュリアの学校の教材にしようという計画もあった。10月には『真神教暁』の版の作成および *Line upon Line* の翻訳が開始され、翌年1月には『真神教暁』の印刷が完成し、1874年1月19日本部へ以下のようにその成果を報告した。

Peep of Day の翻訳の印刷をちょうど終えたところです。日本人、とくに一般の人々や子どもたちはこの本の翻訳が出たことにとても喜んでいる

ようです。翻訳文は口語体なので、教育を受けていない人々も含め、すべての人々がすっかり理解することができます。…これまでの私たちの働きはすべて教育を受けた人々のためのものでした。…この *Peep of Day* の翻訳によってはじめて一般の人々にも理解できるトラクトを届けることができるようになったのです。

カロザースはこれまでの伝道の対象が知識人に限られていたことから、子どもを含めた漢字を読むことのできない人々のためのキリスト教書籍の必要性を感じていた。そのため、*Peep of Day* の翻訳をするとともに、その訳文は口語体で、かつ漢字を読むことのできない人々にもわかるように訳すということを重視していた。以下では、具体的な翻訳の内容についてみていこう。

2 『真神教曉』の翻訳文

本稿では「巻之一」「巻之二」を同志社大学今出川図書館所蔵のものを、「巻之三」を国立国語研究所研究図書室所蔵のものを用いた。題箋には「真神教曉」とあり、「まことのかみのおしへのよあけ」とふりがながふられている。木版和装本で「巻之一」が58丁、「巻之二」が66丁、「巻之三」59丁の3冊から成る。⁽³⁴⁾

先にカロザースが口語訳にこだわったと述べたが、1丁の実際の翻訳文（／は改行を示し、稿者による。以下同じ）と原文を以下に対照させてみたい。

第一章

ひとのからだ つい はなし
 人 体に付ての談

こどもしゆたち まへ そら あ おてんとうさま ごらん あれ だれ
 これもし子供衆達よお前がたは空に在る天 日 / を御覧だろが彼を誰

あそこ おき それ かミ おうき し
 か彼所に置ましたか / 子供△其は神さまが御措なさつたのでございます / 師

まへ あそこ て とどき そ だれ
 ○それではお前さんたちは彼所へ手が届ま / すか△い、へ○其れでは誰が

あの天日様を落おてんとさま おち／ないように持もつて居いますか△夫それも神様かみさまでござ／います○
 かミさまと云いふは天国てんごく すんに住すんでいらつし／やいますそをして天国てんごくと云いふは天日おてんと
 様さまのお在あり／なさるところより尚もつとたかい 高あところに在ありますがお前まへ／さんがた神様かみさま
 を御覧ごらんなさる事ことがありますか△／い、へ夫それは見みることはできません○其それ
 でも／神様かみさまは能よく見みて何事なんでも知しつていらつしやいます／し世よの中に在なるとあ
 らゆる物ものは皆みんな神様かみさまが創御はじめにお／造作こしらへなさいますして復また其それを氣きを付つけて護まもつていてく
 ださいかます神さまは先まづ一いち番ばん始はじめ彼あの天日様おてんとさまを／おつくりなさつて是この
 ようにしじゆう照てらして／くださいますし加それにあめ之おこしらへ雨あめを御創造おこしらへなさつて降ふらし／て
 くださいますに風かぜも作こしらへて吹ふかしてくださいま／す…

LESSON I. OF THE BODY.

Mr dear little Children — You have seen the sun in the sky. Who put the sun in the sky? God.

Can you reach up so high? No.

Who holds up the sun, that it does not fall?

It is God.

God lives in heaven; heaven is much higher than the sun.

Can you see God? No.

Yet he can see you, for God sees everything.

God made everything at first, and God takes care of everything. God made the sun, and God makes it shine every day. God made the rain.

God pours it down. God made the wind, and he makes it blow.

これらを比較すると、ほぼ原文に即した訳文であることがわかる。翻訳では会話であることがわかるように子どもの台詞には△、教師の台詞には○の記号が冒頭に附されている。こうした変化はあるものの、基本的には原文に沿って

翻訳がなされており、モーティマー夫人の作品の特徴である、子どもへ語りかける口調がそのまま訳されている。

総ふりがなで談話体の翻訳文になっており、漢字を読めなくてもひらがなを追うことができるようになっている。ただし、たとえば「す」に対しては「寸」を字母とする現行のもの以外に、「須」「春」を字母とするものも用いられるなど、複数の字母をもつかなが用いられており、変体がなを読むことができなければ難しかったかも知れない。

中国では1860年代に、*Peep of Day* の複数の翻訳書が出ていたが、ジョン T. P. ライ (John T. P. Lai) によると中国版では多くの書きかえがなされていたという。たとえば、3章の父についての課では、“What is your father, Mary? — A shepherd.” と、Mary という少女に父の職業を問う文が出てくる。Mary は直訳すれば玛丽であるが、1862年に広東語で訳された『暁初訓道』では、少女は中国の地名にちなんだ亞鳳という名に変更され、職業も当時一般的な職業のひとつであったポーターに変化しているという。これらはともに、当時の中国人読者によりなじみがあり、わかりやすくするための変更であった。⁽³⁵⁾

一方、『眞神教暁』でこの部分は「マレー^名女^女や貴様の父様は何者でございませう△はい羊飼でございませう」と、「マレー」に傍線を付し、女の名であることを示すという工夫はなされているものの、基本的には原文通りの訳になっており、父の職業も「羊飼^{ひつじかい}」と直訳されている。

また、上海美華書館で発行された *Peep of Day* の翻訳『訓児眞言』およびそのハングル訳である『훈아진언』の2章と3章を原文と比較したイ・カウン (이고은) によると、『訓児眞言』も『훈아진언』も、ともに描かれる親子の関係性に大きな違いがあるという。原文では、子を慈しむ母親が描かれるのに対し、『訓児眞言』や『훈아진언』では原文にない文を挿入し、子どもをしかったりたいたいたり、子を厳しくしつけようとする母親が描かれる。また、父親との関係についても、原文では父が子どもを膝の上ののせる描写があるが、こ

うした表現は家父長制をとっていた中国・朝鮮では読者が想定しがたいため『訓児眞言』や『훈아진언』では削除されているという。ほかにも、母親が子どもをあやし、子どもの頬にキスをするという表現なども、中国・朝鮮ともに習慣としてないため削除されたとい・コウンは指摘した。

これらと比較すると、『真神教暁』では she often kissed you を「^{いくたび}幾度も ^{あなた}貴様の ^{くち}口を ^{すう}吻たりして」と訳出しているなど、基本的には原文に忠実に、子どもをあやす父母の様子がそのまま描かれている。『真神教暁』では、全体的にこうした文化の違いに配慮した書きかえの例はあまりみられず、⁽³⁷⁾ beech-tree など訳しにくいものは「ビエイチ」とカタカナでそのまま訳してある。これは可能な限り原文に忠実に翻訳したとみることもできるが、文化的背景に配慮せず機械的に翻訳した結果ともいえる。

全体的に用語の統一などには気を配られておらず、たとえば、Eve は初出の10章では「イバ」だが11章では「イウ」と表記される。Jesus Christ の訳語についてみると、7章では「ジユスクライスト」、10章では「イエスウクライスト」、16章は「ジザス」と統一がみられない。詳しくは後述するが、カロザースは「耶蘇」を「イエス」と訳すか「ヤソ」と訳すかに強くこだわり、結局これをきっかけに宣教師を辞任するまでにいたる。それだけ訳語にこだわったカロザースとしては不用意な翻訳であるといわざるをえず、むしろカロザースの関わりが浅かったことさえうかがわせる。

翻訳にあたっては、もちろん日本人が大きく関わったと考えられるが、実際に『真神教暁』の翻訳に携わったのはどのような人物だったのだろうか。具体的なことはカロザースの口からは語られていないが、これについてもやはり詳しいのは譯者豊田による報告である。

川田新吉ト申スハ旧幕下ノ人ニテカルロデス来着已来彼カ和語ノ師匠トナリ今日マテ、日々和語ヲ教ユ然ルニ近来彼宗教ニ泥ミ教師ト共ニゼーヒ

一プヲブデー／^{訓児真言ト}トイヘル三卷ノ書アルヲ会話ノ語ニ訳シ出板シテ
 廣ク童子并ニ愚徒ヲ誘ントス上二卷近日成訳セリ迂遠ノ謀略巨害眼前ニブ
 ラ(38)

ここからは、カロザースの日本語教師であったのが川田新吉という人物で、カロザースは川田とともに *Peep of Day* の翻訳にあたっていたことがわかる。ここでは「訓児真言ト訳ス」と述べられていることから、おそらく上海美華書館で出版された『訓児真言』もカロザースは入手していたとみられる。しかし、先の比較でみたように、『訓児真言』のような文化的な書き換えはなされておらず、むしろ原文に忠実であったことから、英語からの翻訳であったと考えてよさそうである。豊田の報告には、さらに翻訳の顛末が詳しく書かれている。

今正月三日ノ晩千村五郎カルロデスニ来リ川田新吉ガ訳スル三卷ノ書中
 末ノ一巻ヲ訳シ持参シテ云リ我竊ニコノ巻ヲ反訳イタシタリ何卒コレヲ板
 ニシ玉ヘ併シ私カ訳シタルコト誰ニモ咄シマスナアナタノ反訳トシテ弘メ
 玉ヘト云云教師喜ンテ受ケ清書シテ送り玉ヘ再往調ヘテ后ニ板ニスヘシ上
 二卷モ近々調ヘハ早速出板ノツモリ横浜女教師ノ処ヨリモ早く板ニスルヤ
 フ頼ミマスユヘ丁度宜敷アリマスト(39)

ここからは、川田だけでなく千村五郎も翻訳に携わったことがわかる。千村は「英学熟達ノ人」で「バイブルモ貫読シテ深く宗義ニ達シ」、禁教下ではあるもののカロザースに洗礼を授けるよう頼み、外国人宣教師だけでは不足だろうからぜひ自分も伝道にあたりたいとカロザースらに頼んだと豊田の報告にあ(40)る。ここで報告されているとおり、千村は江戸幕府最大の洋学研究・教育機関蕃書調所の最初の英学教師をつとめた人物として知られ、調所の刊行した『英和対訳袖珍辞書』(1862)の編纂にも補佐として関わった。(41)千村の経歴をみる

と、『真神教暁』が英語の原文から翻訳されたこともうなずける。

またカロザースが「横浜女教師ノ処ヨリモ早く」刊行したがっていたことも興味深い。これはおそらくアメリカ婦人一致伝道協会派遣の女性宣教師らのことを指していると考えられる。翻訳にやらずさんな点がみられるのは、競合する他の教派や団体に先んじて出版したいという焦りもあったのかも知れない。

3 『真神教暁』の評価

タムソンは1873年5月、「カロザース夫婦から大変流暢な *Peep of Day* の1章の訳を受け取りました…可能な限り早く出版できるよう、他のミッションとも協力してトラクト協会へ推薦したい」と好意的に本部へ報告していた。一方でルーミス (Henry Loomis) の評価は手厳しい。⁽⁴²⁾

彼の編纂した『夜明け』（『ピープ・オブ・デイ』）は皆にとってたいへんな失望でした。…私が横浜におけるその仕事の取り扱いに当たっています。1月以来の収入は2.50ドル（原文のまま）です。並外れた値段（75セント）は人々の手の届く範囲を超えていますし、文体は私が今までに見たものとは違っています。⁽⁴³⁾

ルーミスは価格においても文体についても『真神教暁』をまったく評価していないことがわかる。おそらく口語文の翻訳の必要性やカロザースの意図がミッション内で十分に共有されていなかったのだろう。そもそも、カロザースは慶應義塾での給与の報告を怠ったり、様々な面での独断専行がみられたりと、すでに同僚や本部からの不信をかかっており、ルーミスはカロザースに対する不満を本部に書き送ったりもしていた。⁽⁴⁴⁾

売り上げについて、カロザース自身が1875年1月に申告したところによると、1874年の間の売り上げは3冊揃いで155部、分冊で49部とある。ルーミスの1875⁽⁴⁵⁾

年11月25日付の書簡によると、この本はミッションに300ドル費やさせ、本の売り上げは28ドルだったという。⁽⁴⁶⁾ 現在閲覧できる『真神教暁』は極めて限られていることからみても、あまり多くは流通しなかったのかも知れない。⁽⁴⁷⁾

ただ、妻ジュリアは自著のなかでこの本が日本の人々に「夜明け」と呼ばれていること、この本を通してキリスト教に興味をもつ女性がいたことについて述べている。⁽⁴⁸⁾ また、アメリカン・ボードの宣教師デフォレスト夫人 (Mrs. Sarah Elizabeth DeForest) もまた、ある主婦とともに *Peep of Day* の翻訳を読み、信仰に近づいていると報告しているから、カロザースが意図したとおりに漢字を読むことができない女性や子どもの伝道に活用されたようである。⁽⁴⁹⁾

カロザースはその後、宣教師を辞任することになった。きっかけとなったのは、1876年1月の長老派会議において、在日ミッションで発行する印刷物に使用する「耶蘇」の読みとして「ヤソ」「イエス」どちらでもよく、正式には「エス」とルビをふることが決定されたことであった。カロザースは「ヤソ」のみを正式とするという案にこだわり、これが認められなければ宣教師を辞任するとまで宣言した。本心では宣教師を辞めるつもりはなかったが、同僚宣教師らは慰留せず、ミッションの了承を受け、4月4日の在日ミッション会議で正式に辞任が認められた。⁽⁵⁰⁾

こうしてカロザースは宣教師を辞任、企画されていた *Line upon Line* や *Precept upon Precept* の翻訳は、他ミッションであるアメリカン・ボードの女性宣教師ジュリア・ギュリックによってなされることになった。

III *Line upon Line* の翻訳

1 ジュリア・ギュリックと翻訳

ジュリア・ギュリックはウーマンズ・ボード (Woman's Board of Missions) ウースター支部 (Worcester Country Branch) から派遣された独

身女性宣教師である。1845年6月5日、宣教師ピーター・ギュリック (Peter J. Gulick) の末娘としてホノルルで生まれた。⁽⁵¹⁾すでに来日していた兄 O. H. ギュリック (Orrramel H. Gulick) がハワイへ迎えに来て、両親とともに1874年6月来日した。来日後しばらくは日本語を学びながら神戸ホームを手伝い、女性や子どもに英語などを教えていた。とりわけ開拓伝道に手腕を発揮し、神戸在住のころから三田、篠山、彦根などへの伝道を行っていたが、その後は新潟、九州の開拓伝道などで活躍し、「各地の人々の心に強く残る女性となった」といわれる。⁽⁵²⁾

ジュリアは1878年に *Line upon Line* の翻訳である『旧約聖書の話』を刊行しているが、この翻訳を手掛けることになったのはなぜだろうか。先述したが、神戸ホームでは *Peep of Day* がテキストとして用いられており、ジュリア・ギュリック自身も「子どもたちは正確な英語を勉強しながら旧約聖書の物語を学んでいます」と報告していた⁽⁵³⁾というから、神戸ホームを手伝う中で、*Peep of Day* の有用性については十分に承知していたことだろう。

また、アメリカン・ボードの日本ミッションでは排耶書が売り上げを伸ばしていることに対する危機感から、これに対抗する正統なキリストの生涯を描いた書籍の必要があるとの認識が共有された時期でもあった。彼らは、開拓伝道も成果を挙げつつある今こそがキリスト教書籍を頒布する絶好の機会であり、さらに信徒のなかには教養があり英語を解する若者が多数ふくまれることから翻訳者や著述家として彼らの能力に期待した。そこで1877年度にはもっとも高額な2000ドルをアメリカトラクト協会へ要求した。⁽⁵⁴⁾結局援助は600ドルにとどまったが、ミッションがこの時期、伝道のための出版事業をいかに重要ととらえていたかを示すものでもある。

このころからキリスト教書籍の出版はミッションの仕事として規模を拡大し、「女性のための女性の仕事」の一環として女性宣教師も、女性や子どものための書籍を手掛けるようになる。先駆けとなったのは1877年のダッドレー (Julia

Dadley) による日曜学校用のカテキズムである『聖書史記問答』(Question Book for Sunday School) で、彼女は1880年には福音社から『育幼艸』を出版している。1878年4月には神戸教会、兵庫教会、多聞教会合同の日曜学校行事が和田の浜で開催されるなど、日曜学校の活動が盛んになるなかで、子どもたちのための日曜学校用の書物もまた必要になったことだろう。ジュリアが *Line upon Line* の翻訳を手掛けるようになったのは、こうした背景があったと考えられる⁽⁵⁵⁾。

ジュリア・ギューリックが本部の N. G. クラーク (Nathaniel G. Clark) へ宛てた1879年10月7日付の書簡では、兄ジョン (John T. Gulick) と篠山、亀岡、彦根、三田へ伝道に行ったことについて綴られたあと、*Line upon Line* の翻訳を行ったことが以下のように報告される。

…私は小さな本を準備しています。この本は、旧約聖書の話をも簡単な言葉で訳したもので、大部分は *Line upon Line* の翻訳です。この翻訳に多くの時間と労力をさきました。学のある人々のために一般的な構成の本を作ろうとするならば私の仕事は比較的容易なものだったのですが、アメリカの子どもが *Line upon Line* を読んでいるのと同じように、日本の女性や子どもが読み、理解できるように物語を読みやすく書き直すのに骨を折りました。これは新しい試みで、日本では前例のないものです。これまでに出版された同じようなものは、ただ東京で出版された *Peep of day* の翻訳が1冊あるだけです。

英語を理解できる人によって訳されたあと、新島氏が翻訳を承認するようになるまで、すべてを2度書き直さざるを得なかったのです⁽⁵⁷⁾。

このとき、アメリカン・ボードにおけるアメリカトラクト協会の委員は D. C. グリーン (Daniel Crosby Greene) に代わって J. D. デイヴィス (Jerome

Dean Davis) と新島襄が担当していた。⁽⁵⁸⁾委員は出版物の審査を行う必要があったため、新島による確認が行われたものだろう。ジュリアは「アメリカの子どもが *Line upon Line* を読んでいるのと同じように、日本の女性や子どもが読み、理解できるように」との意図で「新しい試み」で翻訳を行ったが、その文体がどのようなものだったのか、次節で確認していこう。

2 *Line upon Line* の翻訳文

Line upon Line でも、モーティマー夫人の作品の特徴である、子どもに語りかけるような文の構造がなされている。たとえば、1章は次のようにはじまる。

My dear children, — I know that you have heard that God made the world. Could a man have made the world? No; a man could not make such a world as this.

Men can make many things, such as boxes and baskets. Perhaps you know a man who can make a box. Suppose you were to shut him up in a room, which was quite empty, and you were to say to him, “You shall not come out till you have made a box,” — would the man ever come out? No — never. A man could not make a box, except he had something to make it of. He must have some wood, or some tin, or some pasteboard, or some other thing.

一方『旧約聖書の話』では、このようにはじまる。

そもへ まこと の かみさま が むかし この せかい を
おつくり なされし ことは / さだめて どなた にも よくへ

ごぞんじ で ござりましようふ。ぜんたい かく の ご／とき せかい
 い が にんげん の ちゑ と ちから にて つくられましようふ と
 は どなた／にても おぼしめすまひが。ちよつと わかりやすき たと
 へ で おはなし いたしまし／よふなれば。こゝに はこ を つくる
 ひとり の さいくにん を きゞれ も だうぐ／も なき あきべや
 に いれおき はこ を つくらぬ うち は この へや を での
 こと／は ならぬ と まうさば この ひと は いかゞ いたしまし
 よふ。とても その あき／べや にて だうぐ と きゞれ なし に
 はこ を つくる こと は できますまい。…

教師と生徒の会話というよりは、読者へ直接語りかけるような訳文となっている。また、一見してわかるとおり、『旧約聖書の話』の大きな特徴は、全文がひらがなのわかち書きで構成されているという点である。これはジュリアの大きなこだわりであったが、自分の周囲にいる翻訳者はみな高度な教育を受けた人々であり、彼らは口語で書くということにまったく慣れておらず、漢語を用いたがることにジュリアは大いに苦心したという（1879年10月7日付書簡）。

当時の信徒の多くは、旧士族出身で漢文の教育を受けてきた。彼らの訳文に対する不満と、より一般に受け入れられやすい訳文を目指すべきだという考えは、他の宣教師にも共有されていたようである。グリーンもまた、聖書も含めたキリスト教書籍の翻訳において、ひらがなを用いることの重要性を主張していた。グリーンは学者たちが漢文に固執する様子を批判し、伝道は学者のみを対象とするものではないのだから「女性や機械工、志の高い店主や機械工(59)が読みたがる文体」が重要だと主張し、のちにひらがなで書かれた『新約聖書(60)またいでん』を出版している。

さらにジュリアは、すべてがひらがなかつ口語で書かれた本への偏見は非常に強いために、翻訳に関わった5人の男性のうち、自分の名前を出したがるの

はひとりぐらいだったといい、次のように続ける。

我々の新聞の日本人オーナーは印刷所の長でもあります、彼はとても困惑しており、このような本は読者に手にとってももらえないだろうとよく話していました。教育を受けた人はこのような本を嫌うし、無知な人々はどうしても読めないからだといいます。彼はこの本を出版することで、印刷所の評判が傷つけられるのではないかと心から恐れている様子でした。彼はわたしたちの間では最も開明的な人物のひとりなのです。

これは、『七一雑報』の印刷人であり、のち福音社の社主となった今村謙吉のことを指すと考えられる。『七一雑報』では、その創刊号において、草双紙などは読めても大新聞が読めない層が多いことを指摘し、『七一雑報』は誰にでも読めるよう平易な文体の新聞であることを宣言し、談話体にふりがな付き⁽⁶¹⁾の文体をとっていた。そのような新聞を発行していた今村にとっても、すべてひらがなで書かれたこの本は受け入れがたかったようである。

進藤咲子は、明治初期の日本社会のリテラシーの階層について、まったく文字の読み書きのできない非識字層、仮名の読み書きができるが漢字の読み書きがあまりできないかなの階級、漢字の素養のある漢字の階級と分類している⁽⁶²⁾。今村が危惧したのは、ひらがなのみで書かれた文章はかなの階級しか対象とし得ないということだったのだろう。先にみた千村五郎も、カロザースに自分の名前を出さないように告げたが、これは当時の知識人に共通してみられた反応だったようで、『眞の道を知るの近路』の翻訳者（佐治職といわれる）も同様に口語体の文章を書いたことを知られば恥だから、誰にも私の名を出さないようにとデイヴィスに告げたという⁽⁶³⁾。漢学の素養のある知識人らにとって、いかに口語文が抵抗あるものであったかがうかがえる。

この翻訳は、ジュリアの意図したように受け入れられたのだろうか。節を改

めてみていこう。

3 『旧約聖書の話』の評価

今村は『旧約聖書の話』の出版を不安視していたが、この本は好評であった。11月に販売が開始され、約半年後の1879年6月18日には1000部刷ったうち、すでに残りは100部以下であるとの報告がなされている。そこで急遽2版を準備し、1500部を印刷しはじめたという⁽⁶⁴⁾。このことは、それだけかなの階級や非識字層が多かったということを示唆している。それを裏付けるのが、同志社大学今出川図書館所蔵『旧約聖書の話』の表紙に附された1枚の貼り紙である。そこにはこのように書かれている。

旧約聖書ノ話 本間氏蔵

本書ハ平かな専門の口語的ニテ訳出シタルモノナリ／其時代ニハ小学校ノ設備モ極テ幼稚ニシテ漸ク／小数ノ童女ガ小学ニ入学ヲ始シ頃ナレバ成人タル／婦女子ニアリテハ極上流家庭ノ婦人ノ外ハ文／字ノ教育アル人ハ甚ダ少ナク大半ハ平かなニテモ／読ミ得タル人ハ少数ナレバ先ツいろは字ヲ学ンテ西教ノニ入ルノ用アリ従テ此種ノ書類ハ甚ダ必要デアツタ／吾人の記憶ニハ最初ノ信者婦人ハ信仰文後チいろは／（破れて1字程度判読不明）読ミ得タル人ハ多数アツタ

これがいつごろ、誰によって書かれたものかはわからない。貼り紙には「本間氏蔵」とあるが、見返しには「Haru」とあり、さらにその下には「大阪天満教会会員西条峰三郎氏家族ヨリ寄贈ス」との書き入れがある。本間重慶はジュリアの最初の日本語教師であり、春はその妻であった。西条については不明だが、本間が1885年から牧師をつとめたのが天満教会であったため、教会員であった西条の手元に渡ったものだろう。さらに中扉には「原胤昭旧蔵書」の印

もあり、この貼り紙がいつごろ誰によって書かれたものかは不明だが、当時を知る人が回想して書いたものと思われる。

貼り紙にあるように、たとえばジュリアが伝道に赴いた滋賀県でも、1879年当時、自分の名前を書ける女性の割合は半数を下回っていた。⁽⁶⁵⁾ジュリアが「女性と子どものために」と述べたように、子どもだけでなくすでに成人した非識字層またはかなの階級の女性にも読まれるものにしようという意図は、翻訳文からも読み取れる。

たとえば17章では、ヨセフが兄弟をもてなす場面が描かれるが、原文では章の終わりに、「ある子どもがあなたにいじわるしてきたらあなたもいじわるをしますか？」や「兄弟があなたのケーキを食べたらどうしますか？」など、明らかに子どもを対象とした問いかけがある。ところが、『旧約聖書の話』ではこの部分は「これみなむかしのことなれど、どなたもむかしのはなしとせず、わがみにこのことをおこなふ」（読点は稿者）ようにとの書きかえがなされている。

全体を通して Children などの呼びかけはすべて訳出されていないことをみると、子どものみを対象としたものではなく、成人した女性にも読まれるための工夫であったと考えられる。そしてこのことが、ひろい読者を獲得した要因であったともいえよう。

この成功を受け、ジュリアは *Line upon Line* の続篇 *Precept upon Precept* もまた総ひらがなで翻訳し、『旧約聖書の話 第二』として1882年に出版した。⁽⁶⁶⁾『旧約聖書の話』はよく読まれ、1886年にはさらに版を重ね、福音社から出版されている。

おわりに

本稿では、イギリスのキリスト教児童文学である *Peep of Day* シリーズが、

日本にどのようなにもたらされ、またどのように翻訳され受容されたのかを検討してきた。イギリスでは聖書を読む準備段階として6歳までの子どもを対象に読まれたものだったが、日本ではキリスト教にはじめて触れる人々に、また英語を初めて学ぶ人々のための教材としても最適のものとして受け入れられた。これらの書籍の流入や翻訳には、アメリカトラクト協会による資金や書籍の援助が不可欠であった。

宣教師らが *Peep of Day* シリーズをなるべく平易に訳そうとしたのは、知識人以外の層にも信者を拡大しようという目的があつてのことであつた。しかし、これらの翻訳は日本に新たな児童文学をもたらし、子どもや非識字層の人々にも書物を読む愉しみを伝えるものでもあつた。

注

- (1) 鳥越信「日本近代児童文学史の起点」鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房、2001年、1-15頁。
- (2) 「日本児童文学の成立：思想史・社会史の視点から」日本児童文学学会編『児童文学の思想史・社会史』東京書籍、1997年、11-43頁。
- (3) 沖野岩三郎著、日本児童文学史研究会編、関口安義解説『明治キリスト教児童文学史』久山社、1995年（初出：沖野岩三郎「キリスト教児童文学史 明治時代」『キリスト教児童文学』2～10号、1957～1959年）。
- (4) 高鷲志子訳「宗教教育」ハンフリー＝カーペンター・マリ＝プリチャード著、神宮輝夫監訳『オックスフォード世界児童文学百科』原書房、1999年、343頁。
- (5) 佐波亘編『植村正久と其の時代』5巻、教文館、1941年、500頁。
- (6) Louisa C. Meyer, *The Author of the Peep of Day Being the Life Story of Mrs. Mortimer by Her Niece Mrs. Meyer; with an Introduction by F. B. Meyer*, London: The Religious Tract Society, 1901.
正式な書名は *The Peep of Day; or a Series of the Earliest Religious Instruction the Infant Mind is Capable of Receiving with Verses Illustrative of the Subject*. だが、本稿では *Peep of Day* と表記する。なお、底本としては American Tract Society 発行、同志社大学今出川図書館所蔵のものをを用いた。
- (7) Frederick Rankin MacFadden Jr., "Favell Lee Mortimer," Meena Khorana ed., *British Children's Writers, 1800 - 1880*, Detroit, Mich.: Gale Research,

- 1996, pp. 217-221.
- (8) Ibid, pp. 218-219.
- (9) 原書は Todd Pruzan & F. L. Mortimer, *The Clumsiest People in Europe, or Mrs. Mortimer's Bad-tempered Guide to the Victorian World*, New York: Bloomsbury Publishers, 2005.
ただしプリュザンによる記事の抄出が恣意的である点や訳書の不備など、いくつかの問題が指摘されている。詳しくは立岡裕士「Mortimerの地理書の概要：プリュザン『モーティマー夫人の不機嫌な世界地誌』批判」『鳴門教育大学研究紀要』25号、2010年3月、273-287頁を参照。
- (10) Meyer, *op.cit.*, pp. 56-57.
- (11) “Letter from Miss Talcott,” *Life and Light for Woman*, vol. 4, no. 5, May 1874, p. 139.
- (12) 坂本清音「ウーマンズ・ボードと日本伝道」同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師：アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 1869～1890』現代史料出版、1999年、133-134頁。
- (13) Noriko Kawamura Ishii, *American Women Missionaries at Kobe College, 1873-1909: New Dimensions in Gender*, New York: Routledge, 2004, p. 83.
- (14) 竹内力雄「熊本洋学校三級（期）生坂上竹松（さかのうえたけまつ）：貴重遺品と洋学校教育」『同志社談叢』36号、2016年3月、115-181頁。
- (15) Annual Report of Japan Mission, 1876, *Papers of the American Board of Commissioners for foreign Missions*, Unit 3, Reel 327, vol. 1.
- (16) 小崎弘道「回顧六十年」同志社事業部編『我等ノ同志社：同志社創立六十周年記念誌』同志社事業部、1935年、32頁。
- (17) 本井康博『徳富蘇峰の師友たち：「熊本バンド」と「神戸バンド」』教文館、2013年、167-168頁。
- (18) 矢吹世紀代訳「日本の京都にて、1878年12月20日、アレン夫人宛」日比恵子監訳、矢吹世紀代・秋山恭子・大熊文子・柿本真代訳「アメリカン・ボード宣教師文書：同志社女学校女性宣教師を中心として〈スタークウェーザー書簡：訳および註〉(4)」『Asphodel』46号、同志社女子大学英語英文学会、2011年7月、176頁。
- (19) 秋山恭子訳「日本の京都にて、1877年5月19日、チャイルド宛」坂本清音監訳、秋山恭子訳「アメリカン・ボード宣教師文書：同志社女学校女性宣教師を中心として〈スタークウェーザー書簡：訳および註〉(1)」『Asphodel』45号、同志社女子大学英語英文学会、2010年7月、300頁。
- (20) *Woman's Work for Woman*, vol. 5, no. 3, May 1875, pp. 80-81.
- (21) 中島耕二・辻直人・大西晴樹『長老・改革教会来日宣教師事典』新教出版社、2003年、80頁。

- (22) Mrs. J. C. Ballagh, "Some Girls of Yokohama," *Children's Work for Children*, vol. 2, no. 6, June 1877, pp. 86-87.
- (23) Alice B Cushman, "A Nineteenth-Century Plar for Reading: The American Sunday School Movemert," *The Horn Book*, vol. 33, Feb. 1957, pp. 61-71.
- (24) 秋山憲兄『本のはなし：明治期のキリスト教書』新教出版社、2006年、19-20頁。
- (25) グリーンは1873年5月、アメリカトラクト協会の図書カタログの価格から半値で卸す約束を取り付けていた（茂義樹「D. C. グリーンの手紙（V）：1873（明治6）年5月より10月まで」『梅花短期大学研究紀要』25号、1976年、49頁）。
- (26) カロザースおよびその妻ジュリアについては多くの研究の蓄積があるが、特に宣教師在任期間については以下を参照した。会田倉吉「カロザースの事績」『史学』36巻2・3号、三田史学会、1963年9月、41-59頁、中島耕二「クリストファー・カロザース：明治学院の一系譜」明治学院人物列伝研究会編『明治学院人物列伝：近代日本のもう一つの道』新教出版社、1998年、104-120頁、同「ジュリア・ドッジ・カロザース：女性のための女性の仕事」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』38号、2006年2月、145-171頁。
- (27) 横浜開港資料館所蔵 *Records of U. S. Presbyterian Missions* を使用した。以下で引用するカロザース書簡については特筆しないかぎり長老派本部のラウリー博士（J. C. Lowrie）宛である。
- (28) 川崎晴朗「カロザース夫人の見た築地居留地（3）」『都市問題』83巻1号、1992年1月、105-106頁。
- (29) 原胤昭「基督教古文献売出し時代の思ひ出」『福音新報』1920号、1932年6月9日。
- (30) 小沢三郎「譯者正木護の耶蘇教探索報告書」『幕末明治耶蘇教史研究』亜細亜書房、1944年、319-370頁。
- (31) 大日方純夫『維新政府の密偵たち：御庭番と警察のあいだ』吉川弘文館、2013年、71-72頁。
- (32) 小沢三郎「慶應義塾御備教師Cカロゾルス」『明治文化』。16巻10号、明治文化研究会、1943年10月、7-18頁。
- (33) 譯者豊田道二等「耶蘇教譯者各地探索報告書」早稲田大学図書館古典籍総合データベース、請求記号：イ14_a4154。杉井六郎校注「小沢三郎編日本プロテスタント史料（一）：譯者豊田道二の耶蘇教徒探索報告書について」『キリスト教社会問題研究』20号、同志社大学人文科学研究所、1972年3月、181頁。
- (34) 同志社大学今出川図書館所蔵の「巻之一」には「J. D. Davis」の署名が、「巻之二」には「同志社生徒 喜多梅二郎拝借」の書き入れがある。また、国立国語研究所研究図書室所蔵の「巻之三」1丁表には「聖書 其出版年月ヲ知ラザルモ明治初年前後ノモノナラン 聖書トシテ吾邦出版物トシテハ蓋シ最初ノモノナラ

- ン」と書き入れがある。
- (35) John T. P. Lai, *Negotiating Religious Gaps: The Enterprise of Translating Christian Tracts by Protestant Missionaries in Nineteenth-Century China*, Sankt Augustin: Institut Monumenta Serica, 2012, pp. 163-164.
- (36) 이고은「19세기 한중 개신교 전도문서의 번역자와 번역태도 비교: 『訓兒眞言』(1865)과 『훈아진언』(1891)」『번역학연구』18卷5号、한국번역학회、2017年12月、143-170頁。
- (37) ただし、9章では church を「御寺」と訳すなど、意識がおこなわれている箇所もあるが統一されたものではなく、31章では「礼拝堂」と訳されている。
- (38) 前掲杉井校注、180頁。
- (39) 同上。
- (40) 同上。
- (41) 茂住實男「千村五郎：蕃書調所最初の英学教師」『日本英語教育史研究』4号、1989年、37-57頁。
- (42) *Annual Report of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian*, vol. 36, May 1873, p. 90.
- (43) 「1874年8月13日ラウリー博士宛」岡部一興編、有地美子訳『宣教師ルーミスと明治日本：横浜からの手紙』有隣堂、2000年、80頁。
- (44) 「1875年11月25日ラウリー博士宛」、前掲書岡部編有地訳、171-172頁。
- (45) C. Carrothers, “Report of Books sold on Religious Book Depository Tokio Japan during the year 1874,” 4 Jan. 1875.
- (46) 「1875年11月25日ラウリー博士宛」、前掲書岡部編有地訳、170頁。
- (47) 国際基督教大学アジア文化研究委員会編『日本キリスト教文献目録 第2』国際基督教大学、1965年、25頁では、青山学院大学、同志社大学、国学院大学、田中良一の所蔵が記載されている。CiNii で検索すると、他に明治学院大学図書館、天理大学図書館に全巻がある。また、先にみた熊本洋学校の坂上の旧蔵書のなかにも、『眞神教暁』が含まれている。そのほか、山梨大学附属図書館・近代文学文庫にも所蔵があり、国文学研究資料館近代書誌・近代画像データベースで一部が閲覧可能である。全巻ではないが、巻之一・巻之二が東京大学明治新聞雑誌文庫吉野文庫に、巻之三のみが国立国語研究所研究図書室に所蔵されている。
- (48) Julia D. Carrothers, “The ‘Peep of Day.’,” *The Sunrise Kingdom, or, Life and Scene in Japan: and Woman’s Work for Woman There*, Philadelphia: Presbyterian Board of Publication, 1879, pp. 204-209.
- (49) “Letter from Mrs. DeForest,” *Life and Light for Woman*, vol. 11, no. 12, Dec. 1881, p. 449.
- (50) 前掲論文中島1998、116-117頁。

- (51) Clifford Putney, *Missionaries in Hawai'i: The Lives of Peter and Fanny Gulick, 1797-1883*, Amherst: University of Massachusetts Press, p. 80.
- (52) 勝尾金弥『『七一雑報』を創ったひとたち：日本で最初の週刊キリスト教新聞発行の顛末』創元社、2012年、152頁。
- (53) Ishii, *op. cit.*, p. 83.
- (54) *52nd Annual Report of the American Tract Society*, May 1877, p. 98.
- (55) 佐野安仁「明治初期の日曜学校：揺籃期の特色」『キリスト教社会問題研究』31号、1983年3月、56頁。
- (56) アメリカン・ボードの出版事業については、吉田亮「総合化するアメリカン・ボードの伝道事業：日本進出期の教派協会、教育、出版活動を対照にして」前掲『来日アメリカ宣教師』25-32頁に詳しい。
- (57) Julia Gulick to N. G. Clark, 7 Oct. 1879, *op. cit.*, Reel 331, vol. 3.
- (58) *55th Annual Report of the American Tract Society*, May 1880, p.98.
- (59) 茂義樹「D. C. グリーンの手紙 (VIII)：横浜時代(2)；1876年」『梅花短期大学研究紀要』40号、1991年、107-108頁。
- (60) 茂義樹「新約聖書翻訳事業とアメリカン・ボード」前掲『来日アメリカ宣教師』153-175頁。
- (61) 『七一雑報』およびその文体については同志社大学人文科学研究所編『『七一雑報』の研究』同朋舎出版、1986年および金成恩『宣教と翻訳：漢字圏・キリスト教・日韓の近代』東京大学出版会、2013年を参照。
- (62) 進藤咲子『明治時代語の研究：語彙と文章』明治書院、1981年、156頁。
- (63) J. D. Davis, "The Early Difficulties and Present Opportunities on Mission Work in Japan," *The Missionary Herald*, vol. 88 no. 4, Apr. 1892, p. 149.
- (64) O. H. Gulick, Report of the Committee on Publications, 18 June 1879, *op. cit.*, Reel 327, vol. 1.
- (65) 八鍬友広「明治期滋賀県における識字調査」『東北大学大学院研究科研究年報』64集2号、2016年6月、1-18頁。
- (66) 本稿では紙幅の都合で検討できなかったが、*Precept upon Precept* はメソジストのマクレー夫人 (Mrs. Henrietta C. Maclay) の訳で『訓蒙耶蘇物語』として1881年に刊行されたものもあるが、こちらは文語体である (前掲書秋山、100-101頁)。

(第19期第3研究会による成果)